

## 二祖聖光上人の生涯と思想

郡嶋 昭示

〈聖光の生涯〉

聖光の生涯や思想に関する網羅的な研究は、

・小西存祐「鎮西国師に就て」(『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、一九三五)

・梶村昇「弁長―念仏の行者鎮西上人―」(『浄土仏教の思想』一〇 弁長隆寛)、講談社、一九九二)

・梶村昇「聖光と良忠―浄土宗三代の物語」(『浄土宗』二〇〇八)

等がある。数は多くないが現在でも参照すべき研究である。これらの研究をふまえ、まずは聖光の生涯について見てみたい。また、聖光に関する研究論文のリストは阿川文正『聖光上人伝と『末代念仏授手印』』(大本山善導寺、二〇〇二)にまとめられている。

〈伝記資料〉

聖光の伝記資料に関する研究は、阿川文正「聖光上人の諸伝記について」(前掲阿川著所収)にまとめられている。これをもとに整理すると、散佚したものを含め次の伝記が伝わっている。

- 1 「敬蓮社入阿筆の伝記」散佚、敬蓮社入阿述（二二〇〇年代、『浄土鎮流祖伝』に記録がある）
  - 2 「華台房筆の伝記」散佚、華台房作（『鎮西略要伝』（二二九〇）に記録がある）
  - 3 「鎮西上人略縁起」、散佚（彦山に伝うる）と文政『聖光上人伝』の信岡の註にある）
  - 4 「聖光上人伝」弘安七年（二二八四）、弘安一〇年追記、了恵道光撰  
↓慶安四年刊行、文政四年に信岡が注をつけて再版（『浄全』一七所収）
  - 5 『鎮西略要伝』正応三年（一二九〇）、聖護房作か（『三上人研究』に翻刻されている）。
  - 6 『法然上人行状絵図』第四六卷（一三一一～一三三三）
  - 7 『本朝高僧伝』第一三、元禄一五年（二七〇七）、師蠻撰
  - 8 『浄土鎮流祖伝』宝永元年（一七〇四）、心阿撰
  - 9 義山の『聖光伝』散佚（『鎮西香月系譜』の注に廟寺に納めたとある<sup>1)</sup>）。
  - 10 『鎮西上人香月系譜』成立年時不詳、享保一四年（一七二九）、見阿写（義山が『翼賛遺事』と合わせて開版、浄全一六所収）
  - 11 「瑞門筆の上人伝」散佚、瑞門作（文政版『聖光上人伝』の信岡の註にある）
  - 12 『鎮西禪師絵詞伝』全一八卷、天明四年（二七八四）、風航了吟作、和本のみ現存。
  - 13 『大紹正宗国師伝略』全二卷、文政一一年（一八二八）、順阿隆円作、和本のみ現存。
  - 14 『鎮西国師贈号記』文政十一年（二八二八）、隆円撰（『大紹正宗国師』の号を賜った際の法会の記録）
  - 15 『鎮西上人』昭和七年（一九三二）、青柳英珊著（『鎮西禪師絵詞伝』をもとに、当時の伝説などを加えて編纂）
- ※先の研究では道光の『聖光上人伝』の江戸初版本を別本として扱っているが、ここでは省略した。

| 西暦（年号）    | 歳  | 事項   |
|-----------|----|--|
| 一一六二（応保二） | 一  | 筑前国香月に出生 ※母親没す                               |
| 一一七〇（嘉応二） | 七  | 菩提寺に入山・妙法法師に師事                               |
| 一一七五（安元二） | 九  | 書を授かる  |
| 一一八三（寿永二） | 一四 | 授戒をする<br>英彦山に一千日の日参をする<br>比叡山に登る             |
| 一一九〇（建久二） | 二二 | 白岩寺唯心法師、明星寺常寂法師のもとで修学                        |
| 一一九一（建久二） | 二九 | 九州にもどる                                       |
| 一一九三（建久四） | 三〇 | 九州油山の学頭になる                                   |
| 一一九七（建久八） | 三三 | 舎弟三明房の絶入を目の当たりにし、無常に驚く<br>明星寺五重塔勧進・本尊注文のため上洛 |
| 一一九九（正治二） | 三六 | 法然と会う（三ヶ月教えを受ける）                             |
| 一二〇四（元久二） | 三八 | 九州に戻る<br>再び上洛、法然に教えを受ける（六年間教えを受ける）           |

これらの諸伝記のうち、4の了慧道光撰『聖光上人伝』と6の『法然上人行状絵図』は、資料として最も信用されて用いられている文献である。また、聖光の伝記年表は前掲梶村『聖光と良忠―浄土宗三代の物語』に整理されているものが詳しい。これらの史料をもとに要点のみ整理すると次のようになる。

|           |    |                                    |
|-----------|----|------------------------------------|
| 一一二二（建曆二） | 四三 | 九州に戻る                              |
| 一一二八（安貞二） | 五一 | 法然入滅                               |
| 一二三八（嘉禎四） | 六七 | 肥後往生院にて四十八日念仏（『授手印』を記す）<br>著作活動をする |
|           | 七七 | 入滅                                 |

この整理の中、先の二つの伝記資料にはない行状を二つ補ってある。一つ目は生誕と共に母親が没していること、二つ目は英彦山に一千日の日参をしたという点である。

〈母の死について〉

一つ目の母親が聖光誕生と共に没したという点は、生誕地古川の館の跡に建てられたという吉祥寺に伝わる伝説によって知られるものである。先の梶村の二つの研究によると、

（吉祥寺）本堂の裏の森の中に古い石塔があり、

究竟院殿大嘗教阿順乘大居士 承安三年八月二十八日

大宝院殿安譽聖寿妙養大姉 応保二年五月六日

と記されているのが、かすかに判読できる。前者は聖光の父、後者は母の戒名であるが、母の命日は聖光の生  
まれた日である。〔聖光と良忠―浄土宗三代の物語〕五七頁

とあり、現在この戒名は掲示板に整えられて掲示されているが（昭和一二年の改修の際にここより経筒が出土し、い  
までも珍重されている）、梶村によって石刻資料として指摘されており、また寺伝には母報恩のために当寺に聖光自

ら腹帯の弥陀を安置したとされ、今も本尊とされているなど、誕生と共に母を失っていることが伝記として認知されている。

〔英彦山日参について〕

つづいては初学の時期、英彦山に一千日の日参をしたという行状である。この行状も先の二伝記には見られないものだが、英彦山は現在も聖光修行の地として大切にされており、聖光の足跡を語る遺跡が点在している。その根拠のひとつとなるのが12の『鎮西禪師絵詞伝』（以下『絵詞伝』）である。ここには、

豊前国彦山は近国第一の高嶺靈験無双の名神なり。われこの山に祈求すべしとて一千日を期して日参せらる。とあり、その際の地域に伝わる伝説が付されている。<sup>(2)</sup> この伝によると、続けて、

又、彦山の宿坊宝生院 智室谷にこもりて求聞持法を修せらる。

庭前に清泉あり。これを禪師の加持水と名づく。又、同所の立石に日景をはかりて一夏百日時刻をたがへず上の宮に詣して華水供をおこなふ。

とあり、智室谷にある宿坊宝生院に住していたこと、上宮に詣でていたということが記されている。さらに付け加えると、明治期の英彦山の状況を伝えた『明治初年英彦山坊中屋敷図』<sup>(3)</sup>に「智室谷、宝生坊」という坊が記されており、また先の諸伝記のうち15の青柳著『鎮西上人』には、昭和七年当時の伝承として現存する羅漢像や金石地蔵などが聖光の手によるものとして伝えているなど、各種伝説が残り、また3の彦山に伝わる『鎮西上人略縁起』というものがあつた点などからも、この英彦山日参の行状は無視できないものと考えられる。

『鎮西禪師絵詞伝』について

また併せて英彦山の記載のある『絵詞伝』について触れておきたい。『絵詞伝』は他の伝記に対して、最も分量が多く、地域の伝承も含めて作成されたにもかかわらずほとんど参照されていない資料である。確かに本書は当時手に入った諸資料や伝承を、疑わしいと思うものも含めて取り入れられていることから、後に次のように指摘された。

その『鎮西絵詞伝』と称する者を観るに、間、無根の説を増加して以てこれを矯飾し、贋を伝え偽を售り、以て天下後世を欺かんと欲す。  
〔浄全〕一七・三七八頁上、現漢文

これは了恵道光の『聖光上人伝』が再版された際に付された貞嚴の叙である。つまり、『絵詞伝』は根拠のない説を追加し、偽りを伝えるものであるとされているのである。確かに『絵詞伝』には、聖光上人が大原問答を拝聴していた、聖光上人が中国に渡った、といった、疑わしい記載も見られるが、これらの記載も当時伝わっていた『大原談義聴書抄』『鎮西略要伝』をもとに記されたものであり、中には著者了吟が、

文治第五（一一八九）（己酉）の春、叡山よりかへりて同年秋八月渡宋すといひ、

あるいは建久元年（一一九〇）（庚戌禪師二十九歳）台嶽より故郷にかへるといふ伝説いまだつまびらかならず。

（※西暦は補った）

といっているなど、「どれが正しいのかはわからないが、両説あげておく」と言って取り上げていることがわかり、了吟が当時伝わっていたものを主観で取捨して執筆したものでは無いことがわかる。したがって確かにこの『絵詞伝』に全面的に依ることは注意を要するとしても、これによって行状を補っていくことは必要と考える。その代表例が先の聖光の英彦山での行状であり、道光の『聖光上人伝』や『法然上人行状絵図』には記されていないもので

あるが、当時の行状や立地状況などを考えると、否定もできないものである。今後この伝記資料に記される当時の伝承などに光が当たれることを願い、研究の進展が期待される。<sup>(4)</sup>

〈聖光の行状の概観〉

上記の整理をもとに聖光の行状を概観してみたい。九州北部香月の庄に生を受け、すぐに母を失った聖光は、明星寺の塔頭と考えられる菩提寺にて仏門に入り得度、後に登壇受戒（観世音寺戒壇か）し、明星寺一山にて修学することとなった。その際、その地域の霊峰英彦山まで一千日の日参をし、学問と修行ともに修す。その後優秀だった聖光は比叡山に登り、宝地房証真に師事して天台の教えを学ぶ。九州に帰った後は油山という組織に入り、学頭を勤める。その際明星寺の舎弟三明房の生死をさまよう姿を目の当たりにし、無常を痛感する。その後明星寺の五重の塔（三重とも）の勸進で、本尊を迎えるために京都へ赴き、そこで法然と出会って師事することとなる。本尊を明星寺に納めた後再度上洛して法然から教えを得る。その後九州に帰り、高良山の麓にて一千日の念仏をする。草野永平の寄進によって善導寺を建立し拠点を得る。肥後の往生院にて四八日の念仏行を修して『末代念仏授手印』を記す。高良山近辺にもどり八女の天福寺にて三祖良忠と出会い、『浄土宗要集』を講義する。後、執筆活動を経て善導寺にて往生する。という行状が確認できる。

〈活動した組織〉

この行状のうち、登場する当時の寺社組織として、明星寺、比叡山、油山、高良山といった組織がある。これらの組織に関する研究は、比叡山の研究は重ねられているが、他には若干の高良山の研究があるのみで、明らかにな

っていないことが多い。しかし、初学の地明星寺近辺は菩提寺をはじめ、大日寺、白岩寺といった末寺があったといい、五重の塔の開堂供養とされる法会では、炊いた米が塚のようになったという伝説があるなど、<sup>(5)</sup> 寺社組織としても経済的にも大きな組織であったことが考えられる。そして京都より戻った聖光が活動したのが高良山の近辺であるが、高良山は若干の歴史史料に登場する組織で、法会も活発に行われ、僧も多く活動していたことが考えられる。<sup>(6)</sup> ここに属して活動したかどうかははっきりしないが、土地の有力者の帰依を得て初めて善導寺という拠点を得ることとなったのが高良山のある地域であることから、関係の深い組織であったのかもしれない。このような状況を見ると、聖光が法然から念仏の教えを得て九州で広めることになった以降、伝記上活動したとされるのは高良山の近辺と往生院のある熊本の地域である。つまりこの地域にいた人々、恐らくは寺社組織に属していた僧が念仏の教えを広めていった対象の中心だったのではないかと推察できるのではないだろうか。

〈聖光の著作〉

著作に関する網羅的な研究は、先の小西存祐の研究、今岡達音『浄土宗全書』解題（『浄土宗全書』二二、一九三四年、浄土宗聖典刊行会）、福原隆善「聖光上人の学問的性格」（『源智辨長良忠三上人研究』、一九八七年、同朋舎）、恵谷隆戒「宗義顕彰・鎮西、記主著作解題」（『浄土宗全書』一〇巻、一九七〇年、山喜房仏書林）などの研究がある。これらの研究をふまえて著作を整理すると次のようになる。

| 典籍名       | 巻数 | 成立年時       | 所収                   |
|-----------|----|------------|----------------------|
| 『末代念仏授手印』 | 一卷 | 安貞二年（一二二八） | 〔昭和重修末代念仏授手印〕、『聖典』一五 |
| 『浄土宗名目問答』 | 三巻 |            | 〔浄全』一〇）              |



- 『念仏名義集』 三巻 寛喜三年（一一三二） 『浄全』一〇）
- 『念仏三心要集』 一巻 寛喜三年（一一三二） 『浄全』一〇）
- 『浄土宗要集』 六巻 嘉禎三年（一一三七） 『浄全』一〇・『日蔵』九〇）
- 『徹選択本願念仏集』 二巻 嘉禎三年（一一三七） 『浄全』七）
- 『円戒秘決己証』（伝） 一巻 『浄土学』五・六、石井教道論文）
- 『識知浄土論』（伝） 一巻 『浄全』一〇）
- 『善導大師和讃』（伝） 一巻 『日本歌謡集成』第四巻）
- 『念仏往生修行門』 一巻 『三田國文』五四 二〇一二）
- 『物語集』 散佚
- 『臨終用心鈔』 一巻 『仏教文化研究』三八、神居文彰論文）

これらのうち、思想的に聖光のものと考えにくい内容であることから、(伝)と付した『円戒秘決己証』『識知浄土論』『善導大師和讃』は偽撰として扱われている。また、近年まで『法然上人行状絵図』に断片的に引用されて伝わっていた『念仏往生修行門』が、二〇一二年、陽明文庫から全文が発見され、恋田知子によって翻刻・発表された(『三田國文』五四、二〇一二)。これらの著作のうち、従来の研究で特に注目を集めているのが『末代念仏授手印』(以下『授手印』)と『徹選択本願念仏集』(以下『徹選択集』)である。

〔『末代念仏授手印』〕

『授手印』は安貞二年に熊本往生院と宇土西光院にて行われた四八日の念仏会に際して記された教義書である。

師法然から伝えられた念仏の思想を体系的に記したもので、少なからず古写本も伝わっており、諸本の研究をはじめ研究が蓄積されている。『授手印』に関する研究は、阿川文正『末代念仏授手印』解題（『浄土宗聖典』五巻解、一九九八）において諸本の整理と内容の解説が行われている。述作の因縁として、

（法然）上人往生の後には、その義を水火に諍い、その論を蘭菊に致して、還って念仏の行を失って、空しく浄土の業を廃す。悲しきかなや、悲しきかなや。何が為ん、何が為ん。〔聖典〕五・二二四

とあって、法然滅後に法然が説いた称名念仏の思想をそれぞれが勝手に解釈をして、念仏の行がないがしろにされてしまっていることをなげいていることを伝え、続けて、

肥州白川河の辺り、往生院の内において、二十有の衆徒を結び、四十八の日夜を限って、別時の浄業を修し、如法の念仏を勤む。この間において、徒らに称名の行を失することを悩み、空しく正行の勤めを廃しぬることを悲しんで、かつうは然師報恩の為、念仏興隆の為に、弟子が昔の聞きに任せ、沙門が相伝に依って、これを録して留めて向後に贈る。〔聖典〕五・二二四

といい、白川河のほとりの往生院で四八日の別時念仏会を修し、法然から伝えられた念仏の教えを伝えるために記したとしている。そうして伝えた内容は、五種正行と正助二行の行の体系、三心、五念門、四修、三種行儀という心と行の理想的な形を提示し（六重二十二件の法数と呼ばれる）、

法然上人の言わく、善導の御釈を拝見するに、源空が目には、三心も五念も四修も皆ともに、南無阿弥陀仏と見ゆるなり。〔聖典〕五・二四〇

という法然の言葉をもって、全ては念仏行を修するうちに自然と具わるものであるといい、称名念仏行の重要性を主張している。裏書には当時興隆していた邪義とする説を挙げ、また模範的な念仏者を列挙している。この書に法

然から伝えられた教えの根幹がまとめられており、聖光の想いと後に伝えるべき事柄が示された書として大切にされている。

〔『徹選択本願念仏集』〕

『徹選択集』（上下二巻）は、良忠の伝記『然阿上人伝』によると、

法然上人浄土宗の義を以て、弁阿に伝う。今また弁阿、相承の義并に私の勘文、『徹選択集』を以て、沙門然阿に譲与じ畢ぬ。これを聞く人、慥かにこれを信じこれを行じて往生を遂ぐべし。（浄全一九・四〇八下）

とあって、法然から伝えられた念仏の教えとは別に、聖光独自の思想をこの『徹選択集』に記し、弟子良忠に与えたとされるものである。内容を見ても実際に聖光独自の思想が多く展開されており、いわゆる「二十二の選択義」、「聖浄兼学の主張」、「念仏三昧は不離仏値遇仏の義」、「総別の念仏」といった思想が注目され、昭和初期より坂田良弘、小西存祐<sup>(8)</sup>などの研究で論じられ、後に高橋弘次<sup>(9)</sup>、藤本浄彦<sup>(10)</sup>などの研究で注目され論じられてきた。上巻は『選択集』一六章のそれぞれに注釈を施す形で、下巻は冒頭で「念仏三昧とは何の義ぞや」といって、称名念仏行の価値の高さを主張するために『大智度論』の思想を用いた主張が繰り返されるといふ形で構成されている。良忠の『徹選択鈔』によると、先に下巻の内容を記し終えた後、聖光が題名を『四義集』とすべきか『徹選択』とすべきか悩んでいたところ、良忠の進言で上巻に『選択集』の注釈を添えて上下二巻の『徹選択集』を記したとも記されている<sup>(11)</sup>。内容の詳細は後述する。

〔聖光の思想に関する研究―祖述と顕彰―〕

聖光の思想については先に述べた通り、『授手印』と『徹選択集』の研究を中心として進展をしてきた。この二書が注目されることにより、聖光の思想に、法然の思想をそのまま伝える作業と独自の思想を主張するものとの二面性があると指摘されて論じられてきた。この二面性は「祖述」と「顕彰」（顕彰とも）という語の提唱によって、体系化されてきた。具体的には先の小西存祐の研究において「祖述的、顕章的」という分析が行われ、後に香月乗光が「鎮西教学に於ける祖述と顕彰」（『法然浄土教の思想と歴史』、一九七四、山喜房佛書林）という研究で改めてその分析を提唱し、祖述的立場として「鎮西聖光の浄土教学における結帰一行説の成立と構造<sup>(12)</sup>」において『授手印』の思想を指摘している。このような経緯から聖光の思想を論じる際にこの二面性をもって論じられてきた。本稿でも基本的にこの分析に依って論じていくこととしたい。

〔法然の法語をそのまま伝える作業〕

聖光は自著の各所に「然師云く」「故上人云く」などといって、法然の言葉転記している。こうして残されている法然の遺文は後の我々に多くのことを伝えてくれる。その代表例が、『徹選択集』に残される法然の三学非器の思想および『選択集』述作の経緯を伝えた長文の法然の遺文である。この法語は、

小僧某甲、上人の御手よりいまだこの選択をつたえざる以前に、上人、予に向かつてつぶさに以て告げて言く、世人、皆因縁有って道心を発すなり。いわゆる父母兄弟に別れ、妻子朋友に離る等なり。然るに源空は指せる因縁もなく、法爾法然に道心を発す。故に師匠、名を授けて法然と号す。出離の志、至って深きの間、諸の教法を信じ諸の行業を修す。おおよそ仏教多しといえども所詮は戒定恵の三学に過ぎず。〔聖典〕三、二八四

という言葉から始まる法語である。この法語を聖光が『徹選択集』に残したからこそ、我々は法然が当時の仏教を三学に例え、自身がその器にはないことを述懐し、自らわが身に堪えられる教えを探すことになったという浄土宗開宗の経緯を知ることが出来るのである。また、この遺文の後半は、次のように『選択集』を執筆した経緯が記されている。

上人また告げて言く、「我が所造の書有り、いわゆる『選択本願念仏集』これなり。この書を以て、秘かに汝に伝えんと欲す。この書の造意は、九条殿下、源空に向かい高命を示して云く、対面のついで毎に念仏往生の義、度度これを聞くといえども、即施即廢なり。請う、その文を註して予に賜れと（云云）。源空、この仰せを蒙り辞し申すこと能わず。これに因つて善導の積義を謹んで以てその文勢を記し、兼ねてまたその義勢を陳ぶ」。

（『聖典』三・二八六）

ここに引用したのは冒頭の部分だが、この遺文を聖光が記してくれたからこそ、九条兼実が対面の毎に念仏の教えを伝えられていた点、しかし、都度失念してしまうため書き付けてまとめほしいとの願いで『選択集』を記したという縁起を我々は知ることが出来るのである。このことは現在発見されている法然の門弟の文献の中にはほぼ見ることのできないもので、<sup>(1)</sup>その価値は大変高いといえる。

また、その他、先に挙げた『授手印』に残された「称名念仏行を修するうちに三心四修五念門三種行儀は自然に具わる」とする法語をはじめ、各所でその言葉を残している。これらは『和語灯録』の「諸人伝説の詞」、および『昭法全』「聖光房に示されける御詞」にまとめられている。

〔法然の称名念仏行重視の思想を伝える作業〕

また、法然の遺文をそのまま記すことはせずとも、法然から伝えられた思想を後世に伝える作業が指摘されている。その代表例が『授手印』の思想である。『授手印』の成立経緯のところでも触れた通り、法然の多くの称名念仏行を修するべきであるという思想、その中に三心をはじめとするものは自然と具わるといふ説こそが法然の主張であるとして、『授手印』にその体系が記されている。序文には、

それれば、九品を宿と為んには、称名を以て先と為す。八池を棲と為んには、数遍を以て基と為す（…中略）  
 …… 髓に以て口に唱うる所は、五万六万誠に以て、心に持つ所は、四修三心なり。これに依て自行を専らにする時は、口称の数遍を以て正行と為し：（『聖典』五、一三頁）

とあるように、往生浄土を願う際、称名念仏行を数多く修することが何よりも基本であると冒頭で主張し、信心の部分では三心と四修を基本とすることを述べている。このような主張は伝わっているすべての文献を通じて必ず論じられているものである。このように多くの称名念仏行を、さらにはいついかなる時でも修するべきであると主張は、聖光の基本姿勢であり、これは法然から伝えられたものだと言主張するのが聖光の教学の特色の一つである。

〔聖光独自の主張―聖浄兼学の思想―〕

聖光独自の主張は先述の通り『徹選択集』を中心に論じられてきた。『徹選択集』上では、

そもそも弟子某甲、この『徹選択集』を造って、上人の『選択集』に添えるの意は、深く以てその選択の義を述し徹せんが為なり。これに依って、彼の義底を顕さんが為に、今この問答を致す。それ、念仏往生を知らんと欲せば、まずすべからく一切菩薩の浄仏国土成就衆生の義を知るべし。また一切菩薩の本願を習うべし。

【聖典】三・二六九）  
 といつて、『選撰集』の思想を伝え、その思想に徹底していくという意志を示すためであるという。そして、さらに徹底していくためには「一切菩薩の淨仏国土成就衆生の義」を知るべきであるとかえて主張しており、こうした意志のもとに『徹選撰集』に独自の思想を残したということがわかる。さらに続けて、

沙門某甲、昔、聖道門を学せし時、聊か彼の淨仏国土成就衆生の義を習ひ伝え、今淨土門に入るの後、またこの選撰本願念仏往生の義を相承す。二師の相伝を以て、聖教の諸文を見るに、その義、更に以て教文に違わず。單聖道門の人、單淨土門の人はこれを知るべからず。聖道淨土兼学の人、これを知るべし。（聖典三・二七〇）  
 といひ、菩薩の淨仏国土成就衆生の義を知ること、法然の『選撰集』の思想が多くの經典の思想に通ずることが理解できるといふ主張をしている。このことは、聖道門と淨土門との両方の思想を学んだ者こそ知ることが出来るという「聖淨兼学」の思想として注目を集めた。このように、『徹選撰集』では『選撰集』の思想を顕彰するために、菩薩の淨仏国土成就衆生の思想を中心として独自の思想が展開されている。

### 二十二の選撰義

そして、『徹選撰集』上の十六章の解説で「八種選撰」を伝えた後、「今、この外にまた二十二種の選撰の義を加う。」（聖典三・二七九）といひ、次の選撰義を提唱している。

- ① 選撰一向の義。（『無量寿經』）
- ② 選撰惡業待對の義。（『觀經』）
- ③ 選撰大善の義。（『阿彌陀經』）
- ④ 選撰一行の義。（『文殊般若經』）
- ⑤ 普賢菩薩選撰臨終の義。（『華嚴經』）
- ⑥ 文殊菩薩選撰臨終の義。（『文殊發願經』）
- ⑦ 觀音菩薩選撰本師の義。（『千手經』）
- ⑧ 勢至菩薩選撰因行の義。（『大仏頂經』）
- ⑨ 選撰易行道の義。（『龍樹十住毘婆沙論』）

⑩ 選択名義讚歎の義。(世親『往生論』) ※以上釈尊からインドの人師

⑪ 選択得度念仏の義。(廬山慧遠) ⑫ 選択長生念仏の義。(曇鸞) ⑬ 天台大師選択改悔念仏の義。(智顛) ⑭ 道綽

禅師選択念仏の義。(道綽) ⑮ 善導和尚選択本願念仏の義。(善導) ⑯ 懷感禅師選択見念仏の義。(懷感) ⑰ 少

康法師選択興隆念仏の義。(少康) ⑱ 法照禅師選択末法念仏の義。(法照) ⑲ 慧日三蔵選択念仏の義。(慧日三

蔵) ⑳ 大智律師選択病中念仏の義。(大智律師) ㉑ 慧心先徳選択念仏往生の義。(源信) ㉒ 法然上人選択本願念

仏の義。(法然) ※以上中国から日本の人師

こうして、称名念仏行が多くの經典論書や人師によって説かれていることを示し、『選択集』で説かれた称名念仏の思想が、広く認知されているものであることを主張している。「二十二の選択義」としてこの主張は注目されている。

〈念仏三昧は不離仏値遇仏〉

『徹選択集』下巻の冒頭には、

問て曰く、念仏三昧とは何の義ぞや。答て曰く、念仏三昧とは是れ不離仏の義なり。

問て曰く、不離仏とは何の義ぞや。答て曰く、不離仏とは仏に値遇するの義なり。

問て曰く、値遇仏とは何の義ぞや。答て曰く、値遇仏とは、因地下位の菩薩、必ず果地上位の如来に値遇して、刹那時も仏を遠離すべからざること、譬ば嬰兒の母を離れざるが如し。

〔聖典〕三・二九二

といて、念仏三昧は「不離仏、値遇仏」であると主張している。つまり、念仏三昧によって、阿弥陀仏と常に不離・値遇していることになり、称名念仏は因地下位の菩薩の行と同等であり、称名念仏行の価値は高いことを論じ



ている。この説は『徹選択集』下巻を通じて論じられており、因地下位の菩薩に限らず、真位という位の高い菩薩も同様であるという主張につながり、さらには「地前未証の菩薩及び薄地底下の凡夫はもつとも仏を離るるべからず」（聖典三・三〇八）といつて、凡夫にはなおのこと称名念仏によって阿弥陀仏と値遇すべきであるとし、併せて我々凡夫には称名念仏の行が必要であることを主張するに至っている。

（総別の念仏義）

そして下巻の後半に至つて、

念仏において総別二種の義有り、いわゆる総じてこれをいわば万行皆これ念仏なり。別してこれを言わば口称念仏を以て念仏とするなり。但し善導の意は総を捨てて別を取りたまえり。〔聖典〕三・三二二

といつて、「総別二種の念仏」を説き、称名念仏の行も広く仏教の思想として認められるべき行であり、その意味では仏教で説かれる万行は全て仏を念ずるが故に念仏であり（総の念仏）、善導がその万行の中から選び取ったのが称名念仏行なのであり（別の念仏）、称名念仏行は仏教の思想から外れるものではないという主張をしている。このような主張から、称名念仏行が仏教の思想として認められない状況があったのではないかと想像できるのである。こうした主張が聖光の独自の思想としてこれまでに注目を集めている。

（今後の課題）

このように従来の研究では、聖光は多くの称名念仏行を生涯にわたつて修するべきであるといい、その行の中に

三心、四修といった具えるべき信心は自然と具わるといふ主張を基本姿勢としていること、そして、その称名念仏の思想の奥深さを独自の視点で顕彰して主張していることが指摘されてきた。聖光の業績としては、基本的にはこのようにまとめられると思う。

そして今後の課題であるが、上述の通り、聖光独自の思想は『徹選択集』を中心に論じられてきたのであるが、他の文献における独自の思想が今後指摘されることが望まれるのではなからうか。他の文献を見ると、例えば『念仏名義集』には

或る人、この念仏を悪みて申す様は、何ぞ必ずしも阿弥陀仏の名を唱え奉るのみ、万ずの功德善根の中に取分けて、普く平等の功德とは云うぞや。異なる仏、又余の功德をも正業と立てよかし。南無薬師、南無地藏等、これ等の仏菩薩の御名を唱え奉るも、普く平等なる正業と云うべきや。  
 (『浄全』一〇、三六三下)

という阿弥陀仏以外の仏の名を称えることも平等の功德があるとすべきではないかという説や、また、

或る人、念仏を難じ侍る様は、抑、我れこの『法華経』並に真言こそ忝く御座す、甚深上乘の御法也。(…中略…) されば『法華経』は勝れたり、真言は増り、念仏は劣りたりと思えるなり。  
 (『浄全』一〇、三六七上)

という『法華経』や真言こそ尊いのであり念仏は劣るものだという他者の批判を含む説をとりあげる場面が幾度かある。これに対しては「善導の学問せざる人の難」として対応しているが、このことは、聖光はこうした僧が活動する中で称名念仏の思想を広める活動をしていたということ物語っているのではないだろうか。筆者は、近年このような視点から聖光の独自の思想を見返してみたので、参照賜りご意見を乞いたく思う。<sup>14)</sup>

註

- (1) 『鎮西香月系譜』の注に「然れば則ち上人の行状を記してこれを龕中に併せ藏せんと欲して、これを義山老師に請う。因て師その梗概を録して聖光伝を撰し肆いにその需に応ず。翁肅然として拝受し、記及び伝を合併してこれを廟寺に納め、以て長く寺鎮とす。」(『浄全』一六・九七九下・元漢文)とある。
- (2) 「寿命」「中屋」といった地名にまつわる英彦山日参時の伝説が記されている。
- (3) 『豊前国英彦山 その歴史と信仰』(二〇一六、海鳥社)掲載のものを参照した。
- (4) 15青柳瑛珊『鎮西上人』は「絵詞伝」をもとにまとめられた伝記である。
- (5) 『鎮西香月系譜』(『浄全』一六・九七八下)
- (6) 文治四年(一一八八)『高良山施入帳』(『大日本古記録』第四編之二、四一七頁)、承元二年(一二〇八)『鷹尾社五節句瓶子配分差定等写』(『鎌倉遺文』四三、二六〇頁No五〇五四四)など。
- (7) 坂田良弘『鎮西聖光上人の教学』(浄土教報社、一九三二)
- (8) 前掲小西存祐論文。
- (9) 高橋弘次「二祖聖光における教学の二面」、「徹選択本願念仏集」解題、「徹選択集の思想」、「徹選択集」における菩薩観」「聖浄兼学の精神―聖光の学問的性格をめぐって―」(『統法然浄土教の諸問題』、山喜房仏書林、二〇〇五)。
- (10) 「聖光上人における「不離佛值遇佛」の思想―宗教的實存の視点から―」(『源智辨長良忠三上人研究』、三上人御忌記念出版会、一九八七)。
- (11) 『浄全』七・一一二上
- (12) 「鎮西聖光の浄土教学における結帛一行説の成立と構造」(『法然浄土教の思想と歴史』、一九七四、山喜房佛書林、初出は『塚本博士頌寿記念仏教史学論集』、一九六一、塚本博士頌寿記念会刊)
- (13) 親鸞『教行信証』に「選択本願念仏集者。依禪定博陸(月輪殿兼実、法名円照)之教命所令撰集也。」(正蔵八

三・六四三上)とある程度か。

(14) 拙稿「聖光の聖道浄土二門の教判説と当時の仏教」(『印仏研』一四六号、二〇一八)など。

参考文献

柴田玄鳳編『三上人の研究』、三上人遠忌事務局、一九三五年

三上人遠忌出版会編『源智辨長良忠三上人研究』、三上人御忌記念出版会、一九八七年

坂田良弘『鎮西聖光上人の教学』、浄土教報社、一九三一年

高橋弘次『続法然浄土教の諸問題』、山喜房仏書林、二〇〇五年

梶村昇・福原隆善『弁長隆寛』(浄土仏教の思想一〇)、講談社、一九九二年

梶村昇『聖光と良忠浄土宗三代の物語』、浄土宗、二〇〇八年